1億人のネット宣言 もっとグッドネット

大阪私学
教育情報化研究会

EMA

高校生 ICT Conference 2015

高校生 ICT Conference 2015

言いたい！イマドキのネットのルール&マナー！！

～ 高校生のボクたちだから ～

最終報告会　開催報告書

2015 年 12 月 9 日（水）

主催

高校生 ICT Conference 実行委員会

共催

総務省、文部科学省、内閣府、経済産業省

IT 情報化月間 2015

2016 年 1 月 6 日

第 1.0 版

目　　次

1.　開催概要 1
2.　高校生 ICT Conference 2015　地域開催 3
3.　高校生 ICT Conference 2015　最終報告会　概要 4
4.　高校生 ICT Conference 2015　最終報告会　発表内容 5
5.　内閣府「第 29 回　青少年インターネット環境の整備等に関する検討会」 8
6.　総務省　意見交換 12
7.　文部科学省　意見交換 15
8.　経済産業省　意見交換 19
9.　担当 23

1. 開催概要

名　称：	高校生 ICT Conference 2015 テーマ **言いたい！イマドキのネットのルール&マナー！！** **～　高校生のボクたちだから　～** 第1部「大人のルール&マナー」 第2部「大人が作った子供のルール&マナーを考える」
主催：	● 高校生 ICT Conference 実行委員会 （構成：安心ネットづくり促進協議会、大阪私学教育情報化研究会、一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構、一般財団法人草の根サイバーセキュリティ運動全国連絡会） ● 長野教育委員会（長野のみ） ● 福岡県青少年インターネット適正利用推進協議会（福岡のみ） ● 公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所（大分のみ） ● 特定非営利活動法人 NPO 情報セキュリティフォーラム（神奈川のみ）
共催：	内閣府、総務省、文部科学省、経済産業省、帝塚山大学（奈良のみ）、 大分県教育委員会、大分県高等学校 PTA 連合会（大分のみ）、 神奈川県教育委員会（神奈川のみ）
後援：	一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会、一般社団法人電気通信事業者協会、一般社団法人全国携帯電話販売代理店協会、一般社団法人日本スマートフォンセキュリティ協会、特定非営利活動法人コンピュータエンターテインメントレーティング機構、独立行政法人情報処理推進機構、公益財団法人ハイパーネットワーク社会研究所、全国高等学校情報教育研究会、北海道、北海道教育委員会、北海道高等学校 PTA 連合会、北海道青少年有害情報対策実行委員会、大阪府高等学校情報教育研究会、東京都高等学校情報教育研究会、奈良県、奈良県情報教育研究会、奈良県教育委員会、福岡県公立高等学校長協会、福岡県私学協会、福岡県公立高等学校ＰＴＡ連合会、石川県、石川県教育委員会、石川県高等学校長協会、石川県高等学校 PTA 連合会、いしかわ青少年安心ネット環境推進連絡会、北陸携帯電話販売店協会、社団法人せんだんの会
協賛：	株式会社サイバーエージェント、グーグル株式会社、株式会社ディー・エヌ・エー、グリー株式会社、 LINE 株式会社、株式会社ラック、株式会社メディア開発綜研
協力：	アルプス システム インテグレーション株式会社、株式会社内田洋行、株式会社 NTT ドコモ、KDDI 株式会社、ソフトバンク株式会社、一般社団法人情報教育研究所、デジタルアーツ株式会社、株式会社ミクシィ　（順不同）
開催目的：	高校生 ICT Conference は、2011 年度に「ICT プロジェクト 高校生熟議 in 大阪～ケータイ・インターネットの在り方＆活用法～」として大阪でスタートしました。2012 年度は、東京開催を加え計 17 校 79 人の高校生が参加し、2013 年度は、東京・大阪に加え、北海道、奈良、大分を新たに加えて 5 拠点にて開催し、計 51 校 267 人の高校生が参加しました。2014 度も同 5 拠点にて開催し、計 44 校 221 人の高校生が参加しました。

	高校生 ICT Conference の開催目的には、二つの側面があります。その一つは、教育的側面であり、初対面の人と話し合うという経験の中で、段階的に「考え、まとめる、聞く、話す、見せる、伝える」などの技術を修練することです。第二に社会的に注目を浴びている携帯電話やインターネットをテーマとすることで、大人になる準備段階として、携帯電話やインターネットを安心して安全に使うために、高校生として情報モラルについて自ら深く考え、実践することで、将来のより良いインターネット利用環境の構築の一助とすることです。 2015 年度は、より全国的な規模での展開に向けて、新たに石川、長野、神奈川、福岡、東北を加え、地域を拡大して開催します。 さらに当事者たる高校生の意見を中央に届けるべく、各地域の代表者はサミットにより提言をまとめ、内閣府、総務省、文部科学省、経済産業省で発表を予定しています。 ※平成 21 年 4 月から施行された「青少年インターネット環境整備法」基づき、青少年が安心・安全にインターネットを利用するための環境整備が始まった。民間の自主的・主体的取組が鋭意進められていると共に、行政府に於いても施行状況の検討が進められている。一方、新学習指導要領が平成 23 年度の小学校を皮切りに、平成 24 年は中学校、平成 25 年度は高等学校で全面実施される。また、急速に普及を始めたスマートフォンや新しい ICT（情報通信技術）サービスにおいて、青少年が健全に ICT を利活用できるように育成するため、青少年への指導に加え、保護者や教職員への「情報モラル教育」の啓発活動が重要視されている。今年度は、スマートフォンの登場などにより急速に変化したインターネット利用環境下における諸問題について議論し、高校生が家庭や学校で取組むべき課題とともに、行政、事業者等への要望について本取組で提案し参考に資する。
開催の概要：	【各開催地での内容】※日程は、2. 地域開催の欄をご覧ください。 **・第一部　「大人のルール&マナー」** （1）挨拶　（2）講演　(3)熟議イントロダクション　(4)熟議　(5)グループ発表 （6）講評 **・第二部　「大人が作った子供のルール&マナーを考える」** (1)挨拶　（2）講演　(3)熟議　(4)グループ発表　(4)総評　(5)サミット参加者発表 **【サミット】「言いたい！イマドキのネットのルール&マナー！！** **～　高校生のボクたちだから　～ 」** （1）挨拶　（2）アイスブレイク　（3）提言のための熟議　（4）提言発表 （5）講評　（6）最終報告会参加者発表 **【最終報告会】** 内閣府「青少年インターネット環境の整備等に関する検討会」 総務省、文部科学省、経済産業省にて成果・提言報告及び意見交換
各開催地募集人員等：	募集参加生徒　30 名 募集見学者各回　30 名　（各開催地により変動あり）

参加・参観方法：	参加費・参観無料［要事前登録］
高校生 ICT Conference 2015 実行委員会：	【委員長】 • 米田謙三（大阪私学教育情報化研究会　副会長） 【コアメンバー】 • 齋藤長行（青山学院大学 株式会社 KDDI 研究所） • 猪股 富美子（お茶の水女子大学 人間発達科学研究所） • 石田幸枝（公益社団法人全国消費生活相談員協会　IT 研究会代表・消費者団体訴訟室長） • 植田　威（特定非営利活動法人 NPO 情報セキュリティフォーラム理事） • 小城　英子（聖心女子大学 ） • 他、関係者団体、事業者等 【事務局】 安心ネットづくり促進協議会 〒104-0031 東京都中央区京橋三丁目 14 番 6 号　斎藤ビル 2 階 TEL：03-3562-8850　FAX：03-3562-1180

2. 高校生 ICT Conference 2015　地域開催

高校生 ICT Conference 地域開催では参加した高校生が２つのテーマに沿った議論を実施し、サミットへ行く代表者を選抜します。

	地域	第 1 回	第 2 回	会場
地域開催	北海道	2015 年 9 月 27 日（日）	2015 年 10 月 18 日（日）	札幌ユビキタス協創広場 U-cala
	石川	2015 年 9 月 13 日（日）	―	金沢商工会議所
	長野	2015 年 9 月 5 日（土）	2015 年 10 月 3 日（土）	松本駅前会館
	東京	2015 年 10 月 11 日（日）	―	東京ユビキタス協創広場 CANVAS
	神奈川	2015 年 10 月 4 日（日）	―	岩崎学園
	大阪	2015 年 7 月 25 日（土）	2015 年 9 月 20 日（日）	①　内田洋行　②大阪私学会館
	奈良	2015 年 7 月 26 日（日）	―	帝塚山大学 東生駒キャンパス
	福岡	2015 年 9 月 12 日（土）	―	ガスホール
	大分	2015 年 8 月 29 日（土）	―	アイネス、大分県消費生活・男女共同参画プラザ
サミット		2015 年 11 月 3 日（火・祝）　13:15～17:00		東京ユビキタス協創広場 CANVAS
最終報告会		2015 年 12 月 9 日（水）		内閣府、総務省、文部科学省、経済産業省

3. 高校生 ICT Conference 2015　最終報告会　概要

日　　時：	2015 年 12 月 9 日（水）10:00-17:30
10:00-12:00 13:30-14:30 15:00-16:00 16:30-17:30	内閣府「青少年インターネット環境の整備等に関する検討会」発表・質疑 総務省にて意見交換 文部科学省にて意見交換 経済産業省にて意見交換
場　　所：	［内閣府 中央合同庁舎第 4 号館 ］ 〒100 -8970 東京都千代田区霞が関 3-1-1 ［総務省 総合通信基盤局 中央合同庁舎第 2 号館 ］ 〒100 -8926 東京都千代田区霞が関 2-1-2 ［文部科学省 生涯学習政策局 ］ 〒100 -0013 東京都千代田区霞が関 3-2-2 ［経済産業省 商務情報政策局　情報経済課 ］ 〒100 -0013 東京都千代田区霞が関 1-3-1
出席者：	［最終報告者 ］2 名 羽衣学園高等学校 3 年 女子 福岡県立香椎高等学校 2 年 男子 ［引率 ］2 名 羽衣学園高等学校　教諭 米田 謙三 福岡県立香椎高等学校　教諭 伊原 豊 ［随行 ］5 名 安心ネットづくり促進協議会　事務局長 吉村 浩一郎 安心ネットづくり促進協議会　白戸 和美 一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構　清水 将人 一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構　野沢 健太郎 一般財団法人草の根サイバーセキュリティ運動全国連絡会　工藤 美貴

4. 高校生 ICT Conference 2015　最終報告会　発表内容

全国 9 ヶ所でワークショップ形式の議論を実施し、北海道・長野・石川・神奈川・東京・大阪・奈良・福岡・大分からそれぞれ代表者 1 名を選出。福井・沖縄からの招待参加を含め、合計 11 名による高校生 ICT Conference2015 サミットを経て、最終報告会にサミット参加の高校生から代表者 2 名が、内閣府「第 29 回 青少年インターネット環境の整備等に関する検討会」、総務省、文部科学省、経済産業省において、高校生 ICT Conference2015 で得られた成果を提言として発表しました。

最終報告の内容は主に以下の通り。

【高校生による提言】
『言いたい！イマドキのネットのルール&マナー！！　～高校生のボクたちだから～』
「高校生だからできる好循環サイクル」

１．大人が作ったルールに対する高校生の意見
・ネット・スマホを使っている人にとって、禁止するルールが本当にいいことか
・いま存在しているルールの意義を、当事者が理解しているか
・いま作られているルールがネット社会で起きている問題の根本部分に直結しているか
・大人がつくったルールにもかかわらず、大人たちが守ることができていない

（1）いま存在しているルール（２例）と問題点
（a）中学生以下スマホ保持禁止
⇒SNS などの使用により問題に巻き込まれないため。

（b）夜 9 時以降使用禁止
⇒依存問題への対処法として。

しかし、中学生以下であっても音楽プレイヤーとして使用しており、禁止は守られていない。また、夜 9 時までは使用してよいという解釈により、依存問題は解決していない。
ルールがあるにもかかわらず、逆効果になっている。ルール自体が問題の根本に結びついておらず、課せられている側が意義を理解できていないため逆効果。学ぶ機会を奪い、メリットも無くしてしまう。

（2）ルールを守ることのメリット
ルールを守れば、スマホやネットはとても便利なものである。例として、目的地までの道順を調べたり、クラスの連絡網を回したりするなど活用されている。ポイントは、ルールの具体化と意識改革である。

２．高校生が考えた対策「意識改革サイクル」
高校生の私たちが考えた対策は、「意識改革サイクル」というもの。このサイクルは、「体験」「意識納得」「発信」の 3 つから成り立つ。

●「体験」・・・詐欺サイト体験アプリや、学校教育としてのモラル授業を徹底していく。

さらに新しい制度として、スマホを持つ際に「受講証」や「免許証」を持つ。この免許証等を持つことによって、中高生がスマホ・ネットのトラブルに巻き込まれないことや、モラルの徹底につながっていくと考える。

●「意識納得」・・・先の「体験」において、高校生が危険な体験をすることで、リアルな恐怖感や被害体験を体感することができる。それによって、高校生自身の本格的な学習意欲が出てくるのではないかと考える。危機意識やルールの意義意識の向上が考えられ、最終的には高校生がいま存在しているスマホ・ネットのルールに納得すると共に、これからの新しいルールが生まれる。

●「発信」・・・高校生が一番、力を存分に発揮できるパートである。主体的な行動により、スマホ保持者自身が責任感を持って使用することができる。
現在、日本では高校生のスマホ保持率が 80%を超えており、また SNS などによる広範囲なつながりもある。このようなスマホのメリットは、高校生だからこそ最大限活かすことができる。

高校生が直接発信するということをポイントにして、以下に 3 つの具体例を挙げる。

（1）　啓発動画
高校生ならではのリアルなシナリオを作り、見ている人に共感を得てもらえるような、高校生なりの面白い動画を作って、皆にわかりやすいシンプルなものを作りたい。SNS などを利用して広範囲に啓発が可能。

（2）　大人と子供の学習会
ICT カンファレンスに参加して、このような場の大切さを実感した。これを発展させ、大人と子供が同じ立場で話し合うことにより、お互いの考えを理解できるのではないかと考える。

（3）　出前授業
高校生にとっては復習になり、小中学生にとっては新たな体験になる。これを地域行事として発展させ、講習会や講演会を行い、地域全体がモラルを徹底できる。

●「意識改革サイクル」の特長
　「体験」「意識納得」「発信」と言うサイクルの特長は、SNS などスマホのメリットを活かして広範囲にいきわたらせることができ、発信がまた新たな誰かの体験となることで、継続的に行えるということである。

また、「意識納得」から「発信」の間にルールを具体化できる。実際にルールを課せられるだけではなく、高校生自身がルールに対して意識納得をすることで、ルールがどう変わっていくべきかということを考えるきっかけにもなる。

３．高校生が思う、大切なこと

高校生の私たち自身が考える大切なことは、次の 3 点である。

（1）いろいろな立場の人が共に取り組む
現在のスマホ・ネットのルールは、大人が作り、子供に守るように言っているものである。大人と子供が対等の立場に立ち、守ることができるルールやマナーを新しく見直していかなくてはいけない。

（2）具体的な対処法を実行する
今回の ICT カンファレンス等で話し合われた内容を基に、様々な対処法ができてくると思うが、それを作るだけではなく実際に日本全国で実行を徹底していくことが、意識の向上につながる。

（3）ネット世界とリアルの表裏一体性を理解する
ネット・スマホのルールを作っていく中で最後に大切になってくるのは、大人と子供のリアルなコミュニケーションである。ネット・スマホについてどうしていくべきか、子供と大人が一緒に考えていくことが大切である。

4．まとめ
スマホには様々なリスクがある反面、メリットもたくさんある。これを生かし、リスクを無くしていくことが大切である。その際には、ルールだけでなく保持者のモラルも必ず必要となってくる。ルールを作る大人と、保持者である中高校生が共に協力してメリットを活かしていくことが、より良いスマホの利用につながる。より良い社会は目の前に、スマホと共に。

5. 内閣府「第 29 回　青少年インターネット環境の整備等に関する検討会」

〔最終報告に関する質疑〕

（内閣府構成員：以下構成員）たいへんすばらしい発表ありがとうございました。まさにこれを言いたくて来たのだが、高校生の親の立場として、子供を信じる立場として、大変良いと思った。頭ごなしにフィルタリングで使わせないというのではなく、今日発表があったように、使わせて教育する、育てるということに力点を置いたらどうかということを今日言いたかった。使って、悪いものは悪いということを理解させながら、子供を信用してやるというようなことで、非常にいい発表だったと思う。

（構成員）具体的に高校生が直接発信するということで、啓発動画、大人と子供の学習会、出前授業という提案がある。現在、具体的に何か取り組んでいる高校生はいるか。具体例で効果があった、自分たちも取り組んでいることが小中学生に伝わってよかった、といった事例はあるか。

（生徒）2 人とも経験したことがある。学校で何度か出前授業を行っており、中学校３校に訪れ、講演という形でやらせていただいた。中学生はあまり興味を持たないのではと思っていたが、きちんと前を向いて聞いてくれた。高校生が講演を行うことが新鮮で、聞こうと思ってくれたのかもしれない。また、地元の小中高校生にワークショップ形式で教えるという形で行った際も、教育委員会の方にも来ていただき、大人と子供が一緒に参加した。私たちは教える側であったが、小中高校生や大人の意見も聞くことができるということで自分たち自身も学ぶことができる場となり、こうしたことがとても大切だと思った。行っていない地域もあるので、全国に広げていくべきだと思い、啓発活動として挙げさせていただいた。

（構成員）実体験に基づいて説得力ある提案をしていただいたものと思う。このテーマについては、高校生のほうがよりよくスマホなどネットワークについて理解していることが相対的にあるので、世代交流の形でのこういう学び合いが高校生から提案されたことは、大変心強く感じた。

（生徒）啓発動画は、11 月のサミットで他県から参加した生徒から、すでに自分たちで動画を作成して学校で流しているという実例が挙がり、見せてもらった。すでに学校で「SNS には気をつけよう」といった講演会等が行われているが、そこで流れている動画というのは大人が作ったもので、子供からするとそんな状況は見たことがないとか、そういった例はないのではないか、と思うものだった。高校生自身が動画を作ることによって、同年代ということもあり親近感が湧き、同じ高校生にこうした状況が起きるのならば、自分にもあるかもしれないという危機感が強まるのではないかと考えられたので、今回挙げさせていただいた。

（構成員）提言を聞くとあらゆることについて問題が解決するかのように思えるが、恐らくそうではない。つまり、詐欺のようなものについては効果があるであろうし、長時間利用やネット依存の問題については高校生がしっかり準備をし、啓発することで効果があると思われる。これらももちろん大事だが、我々が悩んでいることは犯罪被害である。出会い系などではネットのことをわかっていても被害に遭う人がおり、わざわざ入り込んで危ない目に遭っている。ネットについて詳しくなればいいという話ではないので、こうした問題に対してどういった対策を取ったらいいか悩んでいる。皆さんの実感とし

て、あえて危ないところに入って危険な出会いをしてしまうという問題について、感じていること、こんなことができたらいいと思うことがあればぜひ教えてほしい。

（生徒）「あえて危険なところに自分から行ってしまう」という点は、高校生は好奇心旺盛なところがあり、理解できる。好奇心が、後で自分が危険な目に遭うということに勝ってしまう。だが、「イヤだ」「怖い」と思うものには手を出さないと思うので、詐欺サイト体験アプリなどで高校生が体験するときに、好奇心が勝る年代であるからこそ、あまり過激でない演出ではなく踏み込みすぎるくらいの啓発動画で、もっと強気にやっていけばいいのではないかと思う。

（生徒）私自身は二つに分けられると思っている。まず、危ない目にわざと飛び込むという例としては、Twitter などに、やってはいけないとわかっていても、載せてはいけない画像をあげること。それは有名になりたいとか、拡散性を理解してやっていると思うのだが、そのパターンではその先にあるものが見えていない。ただ単に「載せてはいけない」といわれても、その先にある将来に関わることなどは、理解していない。先まで見せる、体験するような学習が大切だと思う。また出会い系などは、知識がどうこうではなく、コミュニケーションの問題だと思う。ネット上だけの対策ではなくて、コミュニケーション、ネット世界とリアルな世界の表裏一体性をきちんと理解した上で、現実的な対策、人権的な対策も必要になってくるのではないか、と感じている。

（構成員）先のことが見えないから危ないもの、動画などをあげるということだったが、最近頻繁にマスコミなどで問題動画などが炎上するというニュースが流れていても、それが自分のこととして考えられないのだとしたら、先を見せる動画を作っても心に響かないのではないか。マスコミでの炎上などを、実際の高校生の方たちはどう感じていますか。

（生徒）率直な意見としては、アホやなと思う。昔からやっている人はいたかもしれないが、ネットに載せるとどれだけ周りに見られるか、広がるかがわかっていない。メディアでニュースになり、犯罪だと取り上げられたことによって、ある程度の人は「コンビニのアイスケースに入るのは止めよう」と思ったと思うが、自分のこととしてとらえられていない。飲酒している画像なども、悪いという意識がない。今の段階では難しいと自分は思っている。

（生徒）スマホを持っていない立場から、メディアで取り上げられるようなふざけたことをして叩かれたりしている人たちのことは他人事で、友人との会話の話題になる程度である。他人が何か起こしてしまっても、あの人がいけなかった、で全部終わってしまう。一人ひとりが体感しないと、わからないと思う。

（生徒）メディアに取り上げられた瞬間は、意識してやめておこうと思うが、薄れた頃に勃発するのではと思う。すぐ無くしてしまうのは無理かと思うが、継続的に行うことで減らしていけるのではないかと思う。

（構成員）私たちからも高校生の皆さんにお願いしたいことがある。ここに参加したことはいい経験になると思うが、ここだけで終わらないように、生徒会やサークルで輪を広げていってもらって、横の広がりにも貢献してほしい。物事を変えるというのは大変なことであるが、高校生が力を合わせると動

かせるし、せっかくネットがあるのだから、それを使ってこうしたいい発想を広げて、地に足を着いたような活動になっていってくれたらと思う。

（構成員）初めてスマホを持ったとき、家族で決め事を持ったか。また小学校高学年では、最近急に、親のお下がりや、ねだって買ってもらうということが増えている。LINE を利用したい、たくさんコミュニケーションを取りたいと思っている高学年が増えている。こうした小学生と保護者へのメッセージを聞かせてほしい。

（生徒）スマホを持ち始めたのは中学 1 年生の時である。周りはあまり持っておらず、現状の問題には直面していなかったこともあり、母とあまり決め事をしていなかった。小学の時は、ガラケーをもっていても皆からうらやましがられていたのに、今は小学生でもスマホをいじっている。出前授業の時に、小学生がスマホを持つ理由は、メリットを活かすというよりも友達とのコミュニケーションに重点を置いているためであると思った。高校生は LINE で返事が返ってこなくても、いじめられているとか嫌われているとは思わないが、小学生は繊細なところがあるように思う。親があまり干渉しすぎると子供は反発してしまうので、LINE のチェックをするのではなく、リアルなコミュニケーションをとるようにしてもらいたい。LINE 上だと自分の伝えたいことは伝わらないこともあるので、それを頭に置いた上で使う必要があると思う。

（構成員）（情報教育が）できる先生がいる学校では、こうした高校生 ICT カンファレンスのような授業を受け、出前授業を行い、体験することで知識経験を積むことができる。それを教えることができない、苦手としている学校の生徒は、皆さんと同じように考える機会が無いから考え無しの行動をしているということが、地域関係なく存在する。それは大人の教育現場への対応が行き届いていないことが問題であると思う。今回、皆さんは全国ですごいつながりができた。高校生 ICT カンファレンスに参加した学校がリーダーとなって、同じ高校生で、授業や考える機会がない人たちへの横への広がりや、同じように皆で話し合う機会を設けるなど、取り組んでほしい。また、体験アプリの中で怒られても、デジタルの中で完結すると擬似体験でしかないので、アナログな動きと連動すると面白いのではないか。二つ質問があるが、まず、9 時以降でも友達から助けてと言われるような現状がありそうか。その時に携帯電話がオフラインになっていたら助ける命も助けられない、助けるべき人に手が届かないのではという状況が、身近で感じられることがあるか。

もう一つは、携帯電話が日本で製造中止になるという報道があるが、もし、そうすると、二つ折りのああいう形であっても中身はスマホになってしまう。だから、注意する点がすごくふえる。もし、そうなったときに、今の教育現場とか高校生たちの雰囲気のままで大丈夫かなと私たちはすごく心配で、スマホしかなくなったらどうなると思うか聞かせてほしい。

（生徒）夜歩いていて怖い時は、友達に電話すると安心する。通話が切れたら犯罪だとわかる。こういうこともあり、夜 9 時以降禁止というルールはどうかと思い、挙げさせていただいた。二つ目は、スマホしか持てないならばスマホについてちゃんとした理解が必要。買うときに少しでも、テストなどやってからしか買わせないなども有効ではないか。

（生徒）遅い時間の利用に関して、緊急時の対応が瞬時にできるのは、スマホやネットのメリットだと思う。二つ目は、現在自分はスマホを持っていないが、周りが持っている中で生活している。これか

らの好奇心もあるが、楽しいだけでスマホをいじりつづけて見返りが来たらどうしようと思う時もある。メリットとリスクを同じ地域内の高校生同士で考えていって、リスクがあるからやってはいけないという考え方ではなく、メリットを最大限活用していこうという考え方のほうがよいと思う。

（座長）ありがとうございました。

6. 総務省　意見交換

（総務省）提言の中で、高校生が出前授業に行き、小中学校で教えられるようになるとよいという点が大きなメッセージだと思うが、具体的に自分が行くとしたらこんなことをやってみたい、こういうことがあるとやりやすい、という点があれば教えてほしい。

（生徒）自分の高校では出前授業をすでにやらせていただいており、中学校 3 校に行かせていただいた。アンケートなどは高校生ではできる範囲が限られており、自分たちだけでは難しいので、数字が出ると高校生でも中学生でも納得しやすく、そういったものがあるとやりやすいと思う。

（生徒）啓発動画について、実際に自分の学校でもネット・スマホの使い方を考えようということで講演会が行われているが、こういうものが危ないという動画を見ても実感が湧かない。今回のサミットで、他県から参加した生徒が制作し、自身が出演している啓発動画を見せてもらった。同年代の人がやっているのを見ると、自分も身近な問題として考えなければいけないのだなと実感が湧いてくる。身近に感じることで意識が変わると考えている。
（高校生 ICT カンファレンス実行委員長）サミットが終わった後、いくつかの地域で動画を作ったりする動きが起こっており、学校現場では、ルール作りが流行っている。かつて大学がソーシャルメディアガイドラインをかなり作ったが、その波が名前を変えてルールとして中高の現場に下りてきている。うまくやっていくときにデータ、資料が大きなポイントになる。総務省が出しているデータ、ILAS なども含めて、活用していくと作りやすく、具体的になっていくのではないかと思う。

（総務省）一般の高校生は、こうしたネットのリスクについての知識はどれくらい当たり前に持っているか。知らない人がたくさんいてトラブルに巻き込まれているのか、リスクはわかっていてうまく事故に遭わないようにしているのが大勢なのか、教えてほしい。

（生徒）コミュニケーションでのトラブルは、高校生になるとだいぶわかってきて少ないと思う。ニュースになったように、画像をアップしてしまう問題については危機感が少ないように思う。一度取り上げられたものはしなくなるが、タバコやお酒の画像は良く見かけるので、そういう面では問題になっているが、自分自身のこととしてとらえていないと感じている。リスクをわかっていない人がまだまだいると思う。

（生徒）スマホを持っていないので、ルールに関してはカンファレンスに参加するまで知らなかった。ふざけて遊んでいる画像をいつの間にか撮られて SNS 等でアップされ、どうでもいい動画が遠方の知人まで広がっていってしまって、友達にいらっとしたことがある。自分の興味本位や突発的な面白さだけでトラブル寸前までいってしまうという状況は周りでもしょっちゅう聞くので、一線を越えてしまうと危ないという状況は良く見かける。

（総務省）ルールづくりにおいて、時間を決めるなど色々なルールがあると思うが、LINE などは時間が来てもやりとりを続けてしまうということがあるのではないか。LINE をやっていて、終わるときの合図はどうしているか。

（生徒）高校生 ICT カンファレンスに参加するようになって、依存をとても意識するようになった。依存を知る前は普通に LINE を使っていたが、意識するようになってからは、使う前にどちらが優先か考えるようになった。何時までというのは難しく、LINE は会話の中なので、相手が返してくる時間にもよる。使う前にルールを決めるのも大切なことだが、まず自分自身がどちらを優先するか、友達から助けてと来ているのにご飯食べるから、と言ったら、その友達が問題に巻き込まれたらせっかくのスマホのメリットが生かせない。逆に、今何してる？というのが来てご飯の時間に返すのは、優先順位が違う。それをちゃんと把握していれば、ルールをきっちりと作らなくても大丈夫ではないかと思う。LINE の終わり方だが、仲のいい友達であればスタンプが来たり、話が無くなったら終わりなど、人によって変わってくる。既読未読無視の問題があるので、何々するからバイバイと言ったほうがよく、コミュニケーションのトラブルが無くなる。それができない子が依存になってしまうのではと思う。

（生徒）時間設定をしている人に限って、オーバーして親に怒られているという笑い話をよく聞く。守ることができていないなら設定しても意味がないと思う。自分は（スマホを持ったら）、時間制限は意味がなく、時と場合によるのだと親と話そうという考えを持つようになった。LINE の終わり方はわからないが、持っていない側からすると、LINE が無くても人間は生きてきた。使用時間や終わり方があるなら、学校で会ったときに「うちのルールはこうなので」とあらかじめ直接伝えておけば、自分の現状を理解してもらえるのではないか。リアルなコミュニケーションで伝えておくと、LINE のトラブルは無くなっていくのではないかと思う。

（総務省）スマホを持っていないということだが、インターネットはどういう方法で、家でどれくらい使用しているか。
（生徒）家にパソコンがあり、見ることができる。一日平均 1 時間弱くらい使っていると思う。クラスの連絡網には入れていないので、自分だけ回ってこなかったということがあった。
（総務省）LINE は使っているか。
（生徒）はい。サミット以降、親に頼んで、家でだけタブレット端末を使ってできるようになった。この発表の前２～３週間くらい Wi-Fi の調子が悪く、まったく使えなかったので発表の打ち合わせが前日にできたくらいで、活用できていない。
（生徒）私はすぐに返すほうではないので、一日 10 回やり取りしたらやったほうだと思う。
（総務省）相手は友達か、家族とは利用するか。
（生徒）家族ともよく使う。ご飯は要るかとか、何時に帰ってくるかとか、電話は出られないときがあり、電車の中でもすぐ伝えられるから便利だと思う。
（総務省）家族全員が利用しているか。
（生徒）全員利用している。
（総務省）家族のコミュニケーション手段にもなっているということか。
（生徒）はい。

（総務省）今日はありがとうございました。体験と納得、発信の三つの関係というものに、大変感心した。若い時代、人は誰でも押し付けられたことは納得しないとルールを守れない。自分が納得していないと人に言えないというのはその通りだと思う。拡散してしまう SNS が問題の根幹でもあるわけだが、SNS の発信力を良く使っていくという部分は、とても良い着眼点である。良い活動について広める方法をどう工夫していくかというのがこれからの課題ではないかと思う。

総務省は通信をやっているということもあり、インターネットの利用については、大人子供を問わず安全に使ってもらえるよう常に考えながら仕事をしている。講習や研修だけではうまくいかないと思うので、今回のプレゼンテーションを含め、高校生 ICT カンファレンスという活動自体に期待を持っていきたい。色々な地域で今回のような活動を自立的にやっていく機会がもっと広がっていけばよいと考えている。もう一つのキーワードは自発性、自律自走型。総務省は、これからも皆さんの活動をできる限りお手伝いしていきたい。皆さんもこれから身の回りで広めていくことに努めていってください。

7. 文部科学省　意見交換

（文部科学省　以下文科省）発表ありがとうございました。高校生が直接発信していくということは同じ世代の人や近い世代に大変有効だと思うが、具体例があれば教えてほしい。

（生徒）実際に、中学校で 3 回ほど出前授業を行った。講演という形で、モラルやリスクについて伝えたりした。また、地元の地域で小中学生、教育委員会の方にも来ていただき、ワークショップを開いて皆で考える場を設けたことがある。高校生がやることで新鮮さがあり、年齢が近いからか、よく聞いてくれた。

（生徒）今までは知らない人が作った動画を見ても実感が湧かなかった。サミットで他県の生徒がつくった啓発動画を見せてもらい、同年代の生徒が出演し感じたことを話している動画を見るのは親近感があり、自分も気をつけようという気持ちになった。

（文科省）各地域で大人が色々な取組みを行っているが、「これは違うのでは」「無駄なのでは」と思ったことはあるか。

（生徒）無駄と思うことはないが、子供がやっていると親近感もあるし、勉強という感じがあまり出ないのではと思った。ワークショップも硬い感じではなく、ゲーム的な感じも取り入れながら、遊びのような楽しい感覚で取り組むことができると思う。

（生徒）学校での講演会はムダではないと思う。知らない大人が来て講演しても、他人事のような感じで硬いイメージになるので、ワークショップのような形はいいと思う。良い思い出というのは強く残るので、講演会という形ではなく、もっとアクティブな感じのほうが身につくのではないかと思う。

（文科省）文科省では、学校で学ぶべき内容、学習指導要領というのを決めていて、使わなくてはいけない教科書を検定するというルールを決めている。また、皆さんが「高校を 1 年で卒業して大学に行きたい」と思っても、それはできないというのもルール。最近では、地方公共団体や学校などが策定した独自のルールづくりの動きがあるが「夜 9 時以降の使用禁止」や「中学生以下スマホ所持禁止」というルールに対して、結局、皆さんはどのような結論なのか。これを説得するために、体験して納得してもらうためにサイクルをつくるというのも方法だが、このルールはおかしいのでは、という考えもあり、別のルールがあるかもしれない、という考え方もあるが、結論としてはどちらか。

（生徒）この 2 つのルールに関しては、問題の根本に直結していないのではないかという思いはある。高校を 1 年で卒業できないことに異議が出ないのは皆納得しているからで、スマホのルールは納得されていないと考えている。ルールがあっても問題が解決できておらず、ルールを変えていかないと現状とギャップがあるのではないかと考えている。歩きスマホをしてはいけない、というのは納得するルール。大人と子供が話し合って納得してルールを作っていくべきと思う。

（生徒）自分はスマホを持っていないので、どんな問題があって、なぜ中学生保持禁止が一般で行われているのか、ルールの存在自体に疑問を抱えている。今あるルールは、スマホを今持っていない人は知

らずに、持った時に一から学びなおすのか、と思うと発信する意味がないと思う。スマホ・ネットだけではなくて、社会の一般常識として当てはまるルールの中で、スマホ・ネットのルールを作っていけば、持っていない人の認識も高まると思う。ただ単に禁止という文字が入るルールに関しては、あまり意味がないのではないか。

（文科省）ネット依存になったり、犯罪に巻き込まれる生徒に対して、現行の施策以外にも効果的な対策はないかと思っている。フィルタリングについて、かけられる側としてどう思うか。現在、保護者に対してフィルタリングをしっかりかけるよう呼びかけようという議論があるが、フィルタリングをかけられる側の高校生としては、どう感じているか。

（生徒）サミットでもその話が出た。フィルタリングの会社の方も来ており、その話をした。自分が持つスマホはフィルタリングがかかっている。携帯電話会社を変更したところかかってしまい、勉強に使っていた知恵袋も見られなくなって不便を感じた。フィルタリングは 1 か 10 ではなく、薄さは調節できると聞いた。どこまでかけるかかけないかを自分で設定できるならいいと思う。しかしそれには自分が判断できるモラルが無いといけない。

（文科省）確かに、フィルタリングに段階があるのはあまり知られていない。

（生徒）聞くまで全く知らなかった。段階的ならば、全然かけてもいいなと思う。

（文科省）インターネット上には、「調べもの」等で便利なサイトもあるが、内容に事実誤認を生む可能性があるものも掲載されている。

（生徒）その理由でかけられているのだと思うが、フィルタリングに関わらず、禁止するルールでいい面も消されてしまうと、スマホがある意味は何だろうと感じる。スマホを使うことで海外の子と SNS 交流できるなどメリットを感じているので、こうしたことを変えていかなければいけないと思う。

（文科省）いまスマホを持っていない方に伺うが、いつかスマホを持った時フィルタリングをどう思うか。

（生徒）フィルタリングの存在そのものがモラルの徹底から外れていると思う。なぜフィルタリングがかかっているのか。存在の意味をわからずに縛られている状況を聞くと、存在自体に納得がいっていない。当事者にモラル意識がしっかりしていたら、必要がない。

（文科省）スマホはいろいろな次元の問題があり、いじめの道具に使われたりする。（内閣府の検討会において）フィルタリングの問題については、アプリ、Wi-Fi 経由のフィルタリングがかかっているスマホを持っているのは 4 パーセントしかないという発言もあり、これをどうやって引き上げていくのか、数値目標はないのかという意見が出ていた。こういう議論の中で、そもそもどうしてフィルタリングをかけるのかという点をよく押さえた上で、議論を進行していかなければいけない。文科省も学習指導要領の総則において情報モラル教育をしっかり行っていくことを先生方へのお願いとし、念頭に置いてもらっていると思うが、だから問題が無くなったことではなく、よく勉強していかなくてはと思っている。

印刷物の作成・配布など行っているがあくまでも入口であり、生徒、児童同士で話し合っていくきっかけをどうしていくか、考えていく必要がある。トラブルなどについては、ワークショップ形式が非常に有効ではないかという感じを持っている。カンファレンス参加前と後で知識・考えの深さに違いがあると思うので、もう少しこうした取組みが広がっていけばと思っている。あなた達のような意識を持っている人が、周りの人や友人でインターネットやスマートフォンの利用に関する諸問題について、関心の薄い人たちに、同じような意識・関心を持つように働き掛けてくれるような取組をして欲しい。

（文科省）高校生 ICT カンファレンスに関して、改善点や要望はあるだろうか。

（生徒）知識ゼロの状態から本日を迎え、とんでもない量の情報量を頭に入れて、知識もついたと思うし、スマホを持っている周りの人への考え方も変わった。とても良い経験になったのは間違いない。この活動をもっと広げて、いろんな人が各地区の高校生 ICT カンファレンスに参加するだけでもとてもいい体験になるので、もっと広げていってほしい。多数になれば少数の人はその意見に寄って行きたいものだと思う。多くの高校生に意見を言えるこうした場に参加して欲しい。

（生徒）モラルについて学校の定期テストのように勉強してきたわけではない。高校生 ICT カンファレンスに参加するだけでこれだけの知識が身につくならば、皆参加できたら、勉強をするわけではないのでとても貴重な経験と思うし、皆が体験できたらと思う。高校生 ICT カンファレンスに参加する子はみんなわかっていて、これはいい、これはいけないということを考えている。そうでない子が問題を起こしている。その差をどう埋めていき、皆が参加できるようにできるかは私たち自身の課題であると思う。

（文科省）父母に、スマホを買うときに気を付けるべきことをどうやったらうまく伝えられると思うか。また、家庭における話合いをしっかり持つ方法はどんなことが効果的だと思うか。どうやったら家庭に理解してもらえるか。

（生徒）母親たちがスマホのことをわかっていないというのはよく言われる。自分の家ではよく話すし、スマホで何ができるか親もわかっている。だからルールがなくてもうまくいっている。リアルなコミュニケーションが無いからこそ、母親も子供が何をやっているかわからないし、問題が起こってから「問題が起きてしまった」で終わってしまう。母親自身も何ができるかを理解して、コミュニケーションを取るようにしたらいいと思う。

（生徒）うちは子供にはスマホは必要ないという父親。父親自身は使っており、母もガラケーを 5 年前くらいから使っている。スマホが無くても学校が近いから生きていけるだろうという考え方で指導されてきた。親なりに子供の知らないところでスマホの良い所を学んでいるようだが、同じ中高生の年代はあまり親と会話が無いようなので、皆が持っている年代になってから親に話を通そうと思っても、親に話に行く前に自分からシャットダウンしてしまうという現状がある。小学校の授業参観は結構親は観に来るが、中高になるとぱったり来なくなる。ネット社会になる中で、親に子供と一緒に座ってもらって、授業参観で親子一緒にスマホについて考えてみる時間を持つのも面白いのではないか。

（文科省）本日はありがとうございました。職員と意見を交わして、実のある発表だったと思う。発表を活かせるよう話し合っていく。高校生 ICT カンファレンス実行委員の皆さんも尽力いただき、改めて

御礼申し上げる。ICT 教育は文科省としても重要な問題なので、対応について一緒に考えていきたい。参加された高校生の皆さんには、実践をしていっていただきたい。本日は貴重な提言ありがとうございました。

8. 経済産業省　意見交換

（経済産業省　以下、経産省）この中で一番若い皆さんとして、何歳くらいからスマホを持たせたら大丈夫と思うか。

（生徒）環境にもよると思うが、塾に行き始める、夜遅くなるなどで連絡が要るので、ガラケーでもよいが、私としては中学１年生くらいが新たなステップということで、いいかなと思う。

（生徒）自分がスマホを持っていないのだが、個人的な意見としては、中学 3 年生がよいと思う。たいていの学校で、ルールを中学で学ぶと思うが、高校生は大人として扱われるので、その直前の中学 3 年生がいいのではないかと思う。

（経産省）私の中学高校時代を振り返っても、校則が非常に厳しい学校で、なぜそれが必要かというところがなく、納得感がなかった。納得感を持って高校生が自らルールを体得するということは大切だと思う。メリットとして、道調べやクラスの連絡網、確かにこれは便利だろうと思うが、これだけではなく、メリットとして例えば色々調べれば学習にも使えて自立的に学習できるとか、あるいは世界中の人たちと SNS で友達になるなどプラスの面があるだとか、もう少しメリットを打ち出していったほうが親を説得しやすいのではないかと思う。いま、高校生の皆さんでクラスの連絡網以上に、自己学習とか、世界中の人たちと友達になるとか、どういう形でプラスに使っているのか、実態をよくわかっていないので教えていただきたい。

（生徒）時間を見るのも時計より携帯、計算、音楽、すべてスマホを使っていて、メリットというときりがないほど生活の一部になっている。禁止することは無理なのではないかと思う。いかにリスクをなくしてメリットを考えるかのほうが大切だと思う。

（生徒）持っていないので、無くてはならない感覚がまだわからない。緊急時に友達に借りたりする。課題調べのときに、友達がちょっとスマホを使って・・・と聞くと、手元にあるからいつでもできるというのは羨ましく、効率も上がるのではないかと思う。スマホは羨ましい存在。

（経産省）高校生が中心となって、こうした取組を行っていることが素晴らしいと思う。高校生が核になることで、小・中学生からすると、大人よりも近い存在からアドバイスをもらうことができるし、大人からすると、よく使っている人から話を聞くことができる。最近では、スマホでのオンラインゲームが普及してきており、ゲーム専用機を持っていなくても、スマホさえ持っていればダウンロードしてゲームができる環境になっている。出前授業や地域の学習会での議論等において、ゲームについてはどのような話題が出たのか、また、どのような問題意識を持っているのか、教えていただきたい。

（生徒）ゲームは良い面でも悪い面でも話題となる。悪い面でいうと、課金の問題と依存の問題がよく出る。課金については、親が知らず後から請求が来て驚くことがよくあるようだ。友人には、かなりお金を払ってゲームをやっている子や、親とよく話していない子もいる。課金は目に見えないので良く親と話し合って決めるべき問題だと思う。依存の問題は難しいところがあると思っている。サミットにも依存している子が来ており、自覚していても止められないと言っていて驚いた。考えなくてはならない

問題なのだと思う。

（生徒）自分はやったことがないが、リアルなコミュニケーションの中でゲームの話が出てくるのは男子である。存在は知っていて理解はしているが、細かい話になるとやっている人だけで盛り上がって、やっていない人はその輪に入っていないという状況がある。SNS のいじめだけでなく、輪に入れない孤独感というのを感じさせるのではないかと心配したこともある。同じゲームをプレイしている同士で新しいコミュニケーションが生まれたり、現実世界で良い出会い、良いつながりが持てるかもしれず、持っていない側からするとうらやましくもあるが、無くして欲しいものでもある。

（経産省）スマホやタブレット、PC を製造したり、アプリやソフトウェアを作る事業者も、ネットの問題は大変意識して取り組んでいる。フィルタリングなどはまさにそうであるし、利用者が設定等しやすいような仕組みにサービスの設計をしたり、ネットモラルについて出前講座をしている事業者も多く存在している。こうした事業者に対して、もっとこうしてほしい、こういう機能がほしいなど、何か求めることはあるか。ネット利用に関連する問題の解決に結びつくことで、何かあれば聞かせてほしい。

（生徒）皆の中で出たのは、利用規約があるが、「同意する」を押さないと進めないので、読んでないけれども押す。それだと形だけになっている。それも一つの原因ではないかと思う。誰が使っているのかを考えて文章を工夫して、子供が使っているのだから利用者がわかりやすいようにしてくれたら少しは変わってくるのではないかと思う。

（生徒）日常生活で役に立つ色々なアプリがある。スマホを使いたいからと親を説得するとき、このアプリを使いたいし、これがあれば普段の生活がこんなに良くなると言いたい。利用規約などを分かりやすくして、身近なところにアプリがあってくれたらいいと思う。誰かがいいアプリを持っていたら、自分も使いたいと感じて広まっていくと思うので、良い点、生活に役に立つ面をアピールしてほしい。

（経産省）意識改革サイクルに乗れば問題は解決していくかもしれないが、どう乗せていこうと思うか。啓発動画を見せたり、勉強会などに参加してもらうために、どうやって呼び込もうと考えているか。モラルの話は、スマホだけではなくインターネットを使い始めた頃から存在する。そもそもネット・スマホを使用したい人の中には、動機は不純というか、若干、モラルに外れた動機で使いたいと思う人がおり、積極的に学ぼうと思ってくれるか疑問に思う。そういう人たちに働きかけて呼びこむために、具体的に引き込んでいく方法をどう考えているか。

（生徒）まず、提言には教育という堅苦しい義務的なものとして書いたのだが、問題が解決しないようならば、免許証というように、強制化してしまうこともある。また、サイクルに入ることができていない人がいるのはもっともなこと。我々のようにこうした機会を全員に設けるのは難しいと思うが、啓発動画、楽しい要素を組み入れたもの、例えばグーグルがやっているウェブレンジャーというプログラムは、みんなで啓発動画を載せてコンテストをしようというようなもので、高校生は楽しいことにすぐ乗りたがる。私たちが楽しい要素を取り入れ、勉強というよりエンターテインメントの一つとして組み入れていくことができたらと思う。

（生徒）小学校高学年からスマホを持ち始めているという現状があり、大人から言われることを素直に受け止めやすいのは小学生だと思う。スマホのいい面悪い面を学んでもらいたい親に対しても、一番来ることが多い小学校の授業参観で、子供と一緒に授業に参加して、ネット・スマホのメリットやリスクについて学んでもらう。これが継続的につながっていき、小学校のうちから保護者と一緒に考えるという風景が当たり前になっていけば、自然とサイクルが出来上がっていくと思う。

（経産省）高校生の二人から質問はあるか。

（生徒）アプリを作る際に、それに備わった機能はユーザーにヒアリングして作っているのか。

（経産省）基本的には、事業者が提供したいものを自由に作っている。ただ、規制により作ってはいけないものもあり、そのような場合に指導が入ることはあり得る。基本的には自由にビジネスをしてもらっている。

（生徒）こういう問題が起きているのはコミュニケーションアプリでありスマホだが、それを作っている会社はそれが利益であり、目的としている。しかし、それで問題が発生しており、その対策をその事業者がやっている。まとまらないのですが、会社としてはどう思っているのか。それを止めてしまえば問題は無くなるわけだが、それが仕事であり、利益を追い求めていくものである。会社側としては規制をかけると利用者が減り、利益が減る。そういうギャップが高校生の立場からすると全然わからない。どういう考えなのか。

（経産省）色々な考え方があると思うが、一つは事業者自身も問題が生じた場合にはそれを放置しておくわけにはいかないという立場にあると思う。というのも、自分が作っているアプリで儲けているとして、そこで何か問題が起こったり、そのアプリが危ないということになると、ユーザーが離れていってしまうし、極端な場合には規制されてしまってビジネスができなくなるということもあり得る。放っておくことは望ましくない選択ということになり、自ら対策をしていくというのは自然なことなのではないか。

（生徒）これからは、企業もそういう対策を強化していってくれるということか。ある会社で話をきいたとき、利益も大事だがまず利用者の安全が第一、それがあっての自分たちのやっているアプリであるという話をきいて感銘を受けた。全ての企業がそう考えてくれたら問題も解決しやすくなるのではないか。企業が動いてくれると解決も早く、進んでいくのではないかと思った。

（経産省）CSR という言葉をご存じかもしれないが、企業も社会の一員であり、しかも影響力が大きい立場であることから、社会的に責任を持って自分のビジネスを行うべき存在である。問題が起きたときに自らが真っ先にダメージを受ける立場でもあるので、意識ある企業はしっかりと取り組んでいる。一方、短期的な利益を求めてしまい、そこまで手が回っていない企業もあるかと思う。

（経産省）この取組みで一番苦労したことはどこか。意見をまとめながら議論があったのだろうと思うが、本日を迎えるまで、議論や資料作成で苦労したところはどんなことか。

（生徒）一番苦労した点は、自分がスマホを持っていないので打合せができなかったこと。皆の意見をまとめて発表する立場になったとき、持ってない人の立場も伝えるために調べてみたり、日常の会話で画像をアップロードして問題になることについての意見を聞いたりした。リスクはあると思うが、離れても連絡ができるのはとてもいいことだと思うので、打合せができなかったのが辛く、困ったところではあった。

（生徒）この問題自体に答えが無いけれど、なんとかしなくてはならない。最初は話すのもとても緊張したが、色々なアイデアが出て、色々な地域から来る、初めて会う人とコミュニケーションをとりながら意見をまとめたり、自分の意見を的確に伝えるのはとても大変だと感じた。色々な人の意見を聞くことができて貴重な 3 年だったと思う。

（経産省）今回省庁を 4 カ所回っての気づきはあったか。

（生徒）行くところによって質問が異なり、観点が異なることがわかり、スマホ自体がいろんな方面につながっていることがわかった。一つのものだけを考えたらいいのではなく、企業の話、教育の話、様々に考えなければならず、難しい問題だと思った。

（生徒）スマホが世間や社会に及ぼす影響力を感じた。サミットに参加するまでは、大人を否定する発表が多かった。大人もルールを守っていないというのは自分の直球の意見だが、今日、色々な方の話をきいて、すでに大人もこの問題にどう取り組んでいくべきか悩んでいることがわかった。帰ったら、サイクルを作っていくためにどう広めていくか考えたい。まずは自分の学校での、サイクルが出来上がりそれを地域に広めるためにやりたいことを、先生に提案していこうかと考えている。隣県の活動などが聞こえてきたら、ここに来ていない他県の参加メンバーも活動しているのかなと思うことができる。スマホで連絡を取り合ったら、全国各地にすぐに広まるのではないか。帰ってから頑張っていきたいと思う。

（経産省）ありがとうございました。

9. 担当

大阪私学情報教育化研究会	米田	進行（概要説明）
安心ネットづくり促進協議会	白戸　他	事務局、庶務
一般社団法人モバイルコンテンツ審査・運用監視機構	清水、野沢	撮影、記録
一般財団法人草の根サイバーセキュリティ運動全国連絡会	工藤	記録